

利根川の改流

今から約 350 年ばかり前までは、埼玉県の東部を南流して東京湾に流れおちていた。

今の利根川の下流は、常陸川と呼ばれて、主に鬼怒川、小貝川、霞ヶ浦等の水を受け、利根川とは別の水系であった。

この利根川の流路を人工的に東へ東へと付け替えて、常陸川を利根川本流とし、ついには現在見るように、銚子より太平洋に流出させようとしたのは、徳川家康が江戸に入って以後のこと。

この利根川の改流は、「利根川東遷物語」と言うべき壮大なもので、これまで、吉田東伍、根岸門蔵、栗原良輔など、多くの人々によって論じられてきた。

それは、複雑で、また矛盾と疑問に満ちたものであった。

それは、論者が、治水事業の推進者であったり、土木技術者であったりしたため、国の河川政策との関連で、一定の結論を急ぎすぎたためである。

その意味で、利根川東遷の真実は、これまで明らかにされていなかった

ところが、最近、小出寛氏が、地理学・地質学の方面からこの問題に迫られた。

その成果は、興味深いものである。

利根川東遷の出発点は、文禄 3 年（1594）に現羽生市の北方で、当時、利根川本流であった「会の川」を締め切ったことにあるとされてきた。

しかし、小出氏は、会の川は利根川本流ではなく、一支流であったという。

それは、もし、会の川が本流であるとする、当時の状況では、これを締め切ることは、技術的に困難である。

それゆえ、会の川締め切りには、利根川東遷の意図はなく、その目的は、利根川南部の羽生領・忍領の洪水予防、水田地帯の安定化と新田開発を期待したものであろうという。

そうであるとする、利根川東遷の最初は、文禄 3 年の「会の川締め切り」ではなくなる。

次に注目されるのは、それから約 30 年後の元和 7 年（1621）の「新川通」と「赤堀川」の開削である

新川通とは、佐波より栗橋までの直流河道で、当時は幅わずか 7 間（約 13m）であったが、寛永 2 年（1625）に 3 間（5.4m）、さらに宝永 2 年（1705 年）にも増削して、河道を広げた。

これによって、佐波付近で乱流し、沼沢地に入っていた利根川を一本の河川にまとめることができたと言う。

赤堀川は、この河道の延長で、栗橋から関宿の対岸境まで、関東ローム層の大地を掘割って、常陸側の流頭に接続しようとした。

しかし、最初は、なかなか通水せず、寛永 12 年に開削当時の川幅 7 間を 3 間広げたが、成功しなかった。

そこで、栗橋の下で南に権現堂を掘り、また北に関宿に向かって逆川を掘って、常陸側流

頭につなが、野田市の対岸金杉より金野井・宝珠花を通過、関宿までの大地を掘り割る人工河川、今の江戸川の開削に着手した。

それが完成したのは、正保元年（1644）と言われ、それから10年後の承応3年（1654）に、再び赤堀川の川底を3間掘り下げて、ようやく利根川の水がここをとおって常陸側に流れるようになり、ほぼ現在見るような利根川水系が出来上がった。

こうして利根川改流は、元和7年を始点とし、承応3年まで30年余りの歳月をかけて行われたが、その工事の中心の時期は、寛永期という。

では、なぜ徳川幕府は利根川を東へ流そうとしたのであろうか。

これには、これまでに幾つかの説が出されてきた。

まず、その第一は、防衛線説である。

利根川を北方の大名に対する軍事防衛線にしようとしたと言うのである。

しかし、下野・常陸に豊臣系大名のいた時期と改流の開始は、時期的に大分ずれている。

次は、江戸水害予防説である。

これも土木専門家に言わせるとあまり当たっていないという。

古くは、江戸時代から近く昭和22年のカスリーン台風による栗橋付近、堤防の決壊、葛飾江戸川区辺の大被害まで、利根川を東遷させたために、一度洪水が起こると江戸は、常に大災害を受けてきた。

利根川の水害をなくすためには、東京湾に流すのが最良の策だという。

次は、新田開発説である。

それまで利根川、渡良瀬川等の、流末が乱流していた武蔵国東部は、今見るような利根川水系の成立により、新田開発が可能となり、多くの新田が生まれた。

しかし、それは利根川流路の変化よりも、河道が固定化した事に意味があったのであり、改流の目的でわなかった。

このように、これまでの説は、どれも正しくなかった。

最後は、江戸水運路形成説である。

これは、関東内の河川を結合させ、また海運とも接続し、それをすべて江戸に結びつけるという河川水運網形成を目的とする壮大な計画の一部であったという。

これは、近世初期に成立した「石高制」という幕藩制社会の経済構造の理解に立脚している。

幕府が、関東各地の年貢米を江戸に集めようとしたこと。

当時の大量物資輸送手段としては、「船」以外にはなかったことを考え合わせると、最も説得力をもっている。

これまでの説が利根川のみを取り上げて、東遷、東遷と言ってきたが、これは視野が狭く、同時期に行われた関東内緒河川、あるいは全国的な改流、開削工事の中で、利根川も見なければならぬ。

その結果として、利根川改流により江戸を中心として関東各地に深く広がる水運交通網

を完成させることができたのは確かである。

このことは、房総の歴史にとって、非常に大きな意味をもった。

特に、千葉県の下総が利根川・江戸川をとおしての中心部に直結したことは、その後の経済文化の発展に、計り知れない影響を持つことになったのである。

会の川べ切と赤堀川開削

会の川のべ切りは、忍藩が独自の判断で実施したものであり、

赤堀川は、関東郡代が自ら支配する幕府領の水害を防除するために、独自に行ったものと理解される。やはり、幕府が利根川水系全体を見渡して、治水政策を実施する体制はできていなかったものであり、

享保改革期以前では、藩や郡代、代官はそれぞれ独自に判断して、治水・新田開発を推進せざるを得なかったのである。

もちろん、そのことが結果として、利根川の東遷に繋がった事実は重要である。